こんなんしてます。

わだいのしごと

126

山でもうけましょう

森は希望の宝

「山の植林事業のおかげで子供を大学に行かすことができた」。そう語るのは紀南地方に住む80才代の方。戦後の復興時、政府は、成長が早く経済価値が高かったスギやヒノキによる拡大造林政策を実施。

この植林に山村の人々はこぞって従事しました。苗を背負って夫婦で急峻な山々に入る日々。「それはそれはえらかった」と語られる厳しい労働が、昭和30年代～40年代に10年ほど続きましたが、つらい労働の対価として山村生活には貴重な現金収入をもたらしたのです。

植える一苗一苗を宝だと思って植えたと言います。植林は、銀行に預けるよりももっと大きな利子を生み出すと信じられた希望の宝でした。

人々が一生懸命に植えた木が数十年経って成熟し伐採期を迎えています。しかし、この間、日本はグローバル経済の中で変貌しました。今や木材需要の7割以上が輸入材。日本の山は放置されるか、伐採しても赤字になるなど深刻な問題を抱えています。

山間地では間伐されず、細く線香のように林立するスギ林をよく見ます。暗く弱々しい森は、高度経済成長の影の部分。人々が捨ててしまった希望。未来への意欲の放棄のようにも見えます。

木質バイオマス利用

いえ、森は今でも希望の宝です。

先日、「すさみ木質バイオマス利用勉強会」に参加しました。

放置された人工林は災害にも弱い

バイオマスとは、動植物由来の有機性資源のことで、木質バイオマスである木材は熱や発電のための燃料となります。すさみ町の森林率は93％。勉強会の目的は、すさみの豊富な森の間伐材などをエネルギーとして電気とお湯を作り、町内の家庭や温泉施設などに供給する事業を住民主体で立ち上げること。間伐することで環境保全に貢献し災害に強い森ともなる、雇用や産業を生み出し、地域振興につなげるとの計画です。

北海道の下川町は町の90％が森林で過疎化に苦しんでいましたが、木質バイオマス利用による町づくりで苦境を脱しました。

町の木材から熱を作り、公共施設や民家などに暖房や温水を送る地域熱供給システムを実施。林業が活性化し、熱利用による事業が生まれ、若者の働く場ができ、移住者も増え、化石燃料から木質バイオマス燃料へと転換したことで役場や家庭の燃料費が削減され、削減分は町づくりへの財源に、との好循環を生み出しました。「地域資源を使って地域産業を興し、地域の自立に結びつく」（下川町長）と、エネルギーの地産地消による町づくりを体現しています。

木質バイオマスによる発電は、一定期間電気事業者が電気を買取ってくれる固定価格買取り制度の後押しもあり、認定発電所は全国で102カ所（平成27年3月末、資源エネルギー庁発表）と急増。この時点で発電所を持たない県は和歌山県を含め数県だけでした。

政府は2020年までにバイオマス利用で約5千億円の新産業創出を目標にしています。山は再び宝の山と期待されているのです。

間伐材はチップに加工され燃料となる

すさみ木質バイオマス利用勉強会では、原木量の把握、資金計画、電気や熱の供給先計画など具体的な課題を丁寧に検討。山から生命と生活の維持に必要なエネルギーという宝を取りだし、地域で儲けるための事業計画が練られていました。

環境破壊や一次産業の衰退、何よりも原発というモンスターを抱えてしまった社会の転換に遅すぎることはありません。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。